



圓法志記の巻

特別
ワ 3
6915
10

圓法志記之巻



Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) covering the right side of the page. The text is arranged in several vertical columns, starting from the right edge and moving towards the center. The ink is dark and the characters are fluid and connected.



意不為符

お書の方へ
栗平長月の次
梅の作枝小雛子を付と深居
の大はにまじし時思致や大居
のまじしゆく様しつと居ひと
候子深と居まると候様物候
又くし

深居の大はに坂川の又政又居
ちう證号也たご

又古今集兼十七廿九

かろしうなま君りたえり
おむい
時しつらぬまのまをり

し書てお題讀人云し以し是之
多り右はよ先ハ兼大政又居の
おむい

冬小多竹の竹

お書の方ハ梁平長月の次
梅の竹枝小節子を付と深居
の大はにやもし時息吹や大居
わしがいしゆくおしりかき後ひり
使子深を流きあると仔細物行
えくし

深居の大はに坂川の又政ス信
ちり證号忠信と

又古今集兼十七丹

かろりなすふ思うたえわと
おむい
時しりぬまのあまらる

し書ては題優人云くはし是
多り古はは先ハ新大政ス信の
なりと云るは思ふにの御事
柄ありしをえ付かき是る

一 竹はらばの又春ハ梅をむしり
を盛の枝を深きつるこはるう新し
もちも長き人か七人あす又之中

一 ぼくら枝 ぼくら枝は天出す
尾身はさるの葉の根ゆなり

一 竹枝事一面を流のものもを
つらあめて二系竹右のこはる
一寸はかまゆいの字新しあまらる

一 新鴨 山ヨロヒキ 竹を存是より下の小をを
の小多と号次

一 篁ハ又葉を用托新葎木の小多
ハ竹よほなる

一 林ハ紅葉又ハ萩為 イニ午持葉 竹の
冬ハ多つけ末に竹あかり

初雪の朔の夜

一 竹の竹の備より エダ 又ハはあし
萩 スナキ 又ハ竹まををこし

秋ハ紅葉イニキ持は末又ハ萩スギキ爲すものなり

冬ハ多クつばねイニキ持は末に寄るなり

初冬イニキ持は末の朔ツキの夜

夜多物の備ツキより虫スガ又ははるあつた

萩スギキ爲す又ハ竹イニキ持は末をとりし

松ツギは旭イニキ持は末身イニキ持は末源家の松ツギ傳

産所イニキ持は末根ツギ川の松ツギを制ツギす

官イニキ持は末信イニキ持は末之イニキ持は末腋イニキ持は末移イニキ持は末後イニキ持は末亦イニキ持は末雄イニキ持は末

一ツギ双ツギ身ツギ夏ツギ条ツギ口ツギ傳

仁徳天皇四十二年

放鷹ツギ提ツギ箱ツギ

右ツギ之ツギ條ツギ所ツギのツギ松ツギ夏ツギ依ツギ出ツギ也ツギ

是ツギもツギ後ツギ令ツギ書ツギ寫ツギ統ツギのツギ也ツギ

見ツギるツギ也ツギ

伊ツギ右ツギ始ツギ也ツギ

山ツギ本ツギ樹ツギ也ツギ

平ツギ筑ツギ腸ツギ也ツギ

川ツギ合ツギ為ツギ十ツギ部ツギ

也ツギ義ツギ